

まんだら通信

第168号(通巻200号)

平成22年(2010)07月 佛誕2576年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



しきたりとお年寄りの役割

気のせいかな、この頃元気がないお年寄りが増えてきたように思えてなりません。曲がりなりにも年金ももらえ、医療費も殆ど無料になるなど一昔前のことを思えば随分恵まれていると思うのに、どういっわけでしょうか。

私が子どもだったせいもあるでしょうが、以前のお年寄りは怖いところがあつた。テレビの『おていちゃん』のお父さん。どこか可愛げのある頑固さ。そして「ハイ、ハイ」と夫に従っていながら、実はその旦那さんの手綱をしっかりと握っているお母さん。

あのドラマの中に、今失われようとしている日本の家庭の、暖かさや良さを見る思いがしています。

戦後、世の中が悪くなったという話をよく耳にします。けれども金回りが良くなって、衣食住のすべてで生活しやすくなったことや、レジャーも楽しむゆとりが

出来たこと、また百姓仕事など辛い力仕事から開放されたこと等、良くなったことも多いのですから、悪くなったと一言で片づけるのは間違いだと思います。

一方悪くなったという方を考えてみると、忍耐力がなくなった、口ばかり達者になった、そのくせ礼儀をわきまえない、自分中心の考え方をする……。

またあるでしょうが、こうして並べてみると良くなった方はお金を含めて品物が中心で、手に取ってみることが出来ないもの、つまり心の世界が貧しくなった、と言つことが出来ると思います。

このまま行くと「もので栄えて心で滅ぶ」の言葉通り、家庭も世間もいつそ住みにくく、味気ないものになってしまうでしょう。

これを正す役目を、おじいさんおばあさんに是非お願いしたいのです。

「そらあ、方丈さまダメだ。若えもんは、時代が違ふの一言で片づけられてしまうから、黙つてることにしてるよ」と、お年寄りは言います。

実際はその通りでしょう。

然し、他に適任者がいないのですから、やはりここは一肌脱いでもらわねばなりません。

世の中には『しきたり』があり、家には家風があります。これらは何代も何代もかけてでき上がったものです。戦争に一回負けたくらいのことで急にひっくり返ってしまうようなそんなやわなものではありません。

また、そうであつてはならないのです。

戦争に勝とうが負けようが、暮らしが豊かにならうがなるまいが、正しいものは昔も今も正しく、昔止しくなかつたものは現在もいけないことなのです。

今、しきたりが見失われ、ことの善し悪しが分からない人たちが増えていきます。

お年寄りの皆さんの、身に付いた道徳観や生活態度で、ものの筋道やしきたりを伝えておいて欲しいのです。

子どものごころ聞いた話もいいでしょう。若

い頃の農作業はどうだったか。

伊勢エビやサザエの話。関東大震災の経験。八幡神社のお祭りがどれ程楽しかったか。

ワラ草履や七夕の馬の作り方。ご先祖代々のお墓はこれとこれ。お彼岸には団子を作つて仏壇に供えること。親子のけじめ……。

これらはすべて、皆さんが伝えなければ途絶えてしまうものばかりです。

それから、現在家の中心となり子どもを育てながら働いている、お父さんお母さんに考えて欲しいことは、家の中でのお年寄りの役割についてです。

時にはおじいさんおばあさんが話題の中心になることがあつていいし、寧ろ望ましいことだと思つています。また、子供たちのしつけにもお手伝いを頼みましょう。

要はおじいさんおばあさんと言われるような年配の人たちにどどん発言して欲しいということなんです。『お年寄りを大切に』と言う言葉がはやりですが、大切にすることとは床の間にお飾りして、そつとしまつておくと言うことではない筈です。

この記事は『まんだら通信』の前身、『かがり火第一九号』昭和五三年九月の記事で、私が四十五歳ころ、今から三二年前になります。

沢村貞子さんの半生記を描いた連続テレビ小説『おていちゃん』が放送された頃ですね。あの頃、お客さんが殺到して、町の旅館の予約係がお断りのお詫びばかりしていたという、今では信じられないような高度経済成長の真っただ中でした。でも、書かれていることは少しも古くなつていませんね。で、今バブル経済が終わつても『もので栄えて心で滅ぶ』勢いはそのままです。

例えば、時代だから、楽だから、そのくらいのお金はあるからと、結婚式やお葬式を業者さんに丸投げしています。

プライバシーの尊重などという、見た目の新しさに惑わされて、隣近所の結びつきが弱くなつていきます。

こんな時こそ、体は弱つたけれど口だけは達者なお年寄りの出番だと、今でも思つていますが……。

◆つい先日、アヌラさんという親友と一緒に、アンギーお坊さんが出でになりました。預かっていた分に私からのを合わせて、『あそか基金』に15万円お渡ししました。

サンフランシスコ講和会議の時、日本を弁護して「恨みは恨みによって晴らすのではなく、捨てることである」というブッダの言葉を実行して、我が国のため努力してくれたスリランカ政府代表。「(受けた)恩は石に刻め。(こちらからの)親切は水に流せ」の、ほんの心ばかりの印です。上の写真は『あそか基金』の奨学生のおうちです。粗末な家ですが、お母さんと子供たちが頑張つて暮らしていました。

◆「日本は良い国だったと論文を書いて首になった」田母神元幕僚長ではありませんが、日本は世界に迷惑をかけたと思つている日本人が、今でも多いですね。

教科書やテレビ、新聞や政府が言っていることと180度逆だと思つて、まず間違いありません。「日本は大変な犠牲を払うという難産の末に、我々を植民地から救つて独立させてくれたお母さんです。」タイ首相の言葉です。台湾や韓国がいち早く経済復興したのは、何よりも日本時代に受けた教育水準の高さ、鉄道や工場等の社会的資産があつたからです。

私自身、日本は分不相応な戦争などして世界中に迷惑をかけたと思つていましたが、自分で幕末からの歴史を勉強してみ、間違いに気付きました。

アジアの国々は、日本が自信を取り戻して、要としての役割をしてくれることを、固唾を呑んで見守っています。◆今月の野草はミヤマキケマン【ケシ科ムラサキケマン属】土湯温泉近くの道端で。深山黄華鬘で、黄色のケマンソウ。この辺りでは紫色のムラサキケマンが多いですね。華鬘は仏様に供える飾り物の一種です。

2010.06.09 龍渉



余滴

第五十四話 最期

ある飢饉の村に、体よりも大きな十字架を背負い、腰布ひとつ巻いた男がよろよろとやってきました。

道端には、息もたえだえの人々が土ぼこりのなか、ただ死を待っていました。その男も、何も食べていないように、あばら骨がいまにも飛び出しそうに痩せ衰えていましたが、とにかく大きな十字架を引きずるようにして、道を歩いています。

今にも死にそうな老婆が、その男の脛にしがみつきました。

「神様がやってきたんだ。この人は神様じゃ」

老婆の声で、多くの村人がその男の前にひざまずいて聞きました。

「あなたはひよつとして、私たちを救いに来てくれたキリストですか」

その男は、痩せた胸を突き出して、言いました。「イエース」。

くだらない話ですみませんね。今日は、柄にもなく、聖書と関係があるお話をしましょう。

新聞に出ていた「いい話」です。

いまから六十年以上前、シンガポールのチャング刑務所に旧日本軍のBC級戦犯が多数収容されていました。

BC級戦犯というのは、戦争が終了後、現地の裁判によって裁かれる元日本兵たちの戦犯です。「こいつは、現地の住民を虐待した」という現地人の訴えがあれば、それだけで死刑になった人もいます。

もちろん、弁護士などつかない一方的な裁判ですから、たとえ、そんな事実はなくても、訴えられたら最後。戦犯というと、東京裁判が有名ですが彼らはA級戦犯ですそうでないBC級戦犯が戦地 で名も知れず、絞首刑になつていきます。「ナカムラ」は、軍医でしたが、戦争中、連合軍の捕虜をベッドの上で死なせた罪を問われ、死刑を宣告されていました。

その「ナカムラ」がある日、盲腸炎にかかりました。英国の若い軍医が嫌がる「ナカムラ」を押さえつけ、麻酔を射ち、手術をしました。

手術後、街でたまたま日本語の聖書を手に入れた英国軍医は、回診の際に「ナカムラ」に渡しました。年が近いふたりは、通訳を喜んで語り合いました。生と死について、神とは何か、愛とは……。

十日後、抜糸がすんだ「ナカムラ」は、また囚人房に戻っていききました。それからさらに二週間後のことでした。英国軍医が、たまたま死刑囚の房の前を通ると、鉄格子のなかで、十二人の元日本兵死刑囚がちょうど「最後の晩餐」をとっていました。

英国軍医は、「ナカムラ」をそのなかに見つけました。英国軍医は、通訳を呼んで、鉄格子の前で「ナカムラ」にこう言いました。

「キリストは十字架にかけられ、私たちの罪を担ってくれました。あなたはすでに救われています」

直立不動で聞いた「ナカムラ」は、「よくわかりました、死ぬのは怖くありません。ひとつだけお願いがあります

す。自分が死ぬ前の落ち着いた様子で、別れの挨拶を日本に残している者に伝えてください」と言いました。翌朝、十二人は絞首台にのぼり、次々と死刑が執行されました。

英国軍医は、その時の「バンザイ」の声を一生忘れない、と言います。英国軍医は、「ナカムラ」の遺体の確認をし、その年の秋、英国に戻り、開業医になりました。

それから五十年たった一九九五年の夏、この元英国軍医は、ふと、あの「ナカムラ」の処刑のあと、英国軍医に渡してくれるようにと、看守が手のひらほどの紙を「ナカムラ」から預かり、自分に届けに来たことを思い出したのです。

紙には、たしか、漢字がたくさん書かれていた。

「あれは、いったい何か書かれていたのだろうか？」

元英国軍医は、必死で、当時のカルテを探しました。どこかにその紙をばさんでおいた可能性があるからです。ありました！ 紙こそ黄ばんでいますが、文字ははっきりとわかります。さつそく、ロンドンの会合で知り合った日本人医師に、その文字のコピーを送ってみました。

すると、返事はこうでした。

「ナカムラさんの親族と思われる人の住所と名前ですね。でも、ナカムラさんという苗字ではありません」

その時、元英国軍医は、死刑房の鉄格子の前で、「ひとつだけお願いがあります」と自分に訴えていた「ナカムラ」のすがすがしい眼差しが目にはつ

きりと浮かんだのです。

（そうだ、大事なことを私は忘れていた。彼の優秀な頭脳、最期まで立派な軍医だったことを伝えなければ……）

元英国軍医は、日本大使館に手紙を書きました。だが、十五年たつても、まだ連絡はとれません。

老いも進む。約束を果たさなければならぬ。

そして、元英国軍医は、思ったのです。

（私も「ナカムラ」も若かった。不幸な戦争があつたが、私たちは友になれた。だが、もし、私の読めない漢字のその住所と名前が、彼の婚約者だったら、私はいったい彼にどう謝つたらいいのだろうか……）

もし、あなたの身のまわりで、「ナカムラ」という若き軍医に戦争前に恋をし、しかもその彼がシンガポールで亡くなったということを知っているおばあちゃんがいいたら、ぜひ、この元英国軍医に知らせてください。

アラン・ラブレスさん。英国ケンブリッジに住んでいます。

そして、いま、九十歳です。

「毎号、このお話を読むのが楽しみです」というかたが、大勢いらつしやいます。

この雑誌『MOKU』の出版元に、このお話を転載させて戴きたいとお願いしたところ、筆者の鳳豊師匠に連絡して、どうぞお使い下さいとの返事を戴きました。

「生きる意味」を真っ正面から考える、近ごろでは珍しい月刊誌で、毎月届くのが楽しみです。

龍渉